

# 1 カルテの記入漏れ・誤記を点検

## 2 医師らに働きかけ、記録充実

患者を  
支える人々

診療情報管理士

いながきときこ  
稲垣時子さん

かつて、診療時のカルテは医師の備忘録として用いられ、治療が終われば束ねて保管されるだけだった。近年、カルテ開示が始まったことから診療録が真直され、さらに電子カルテの導入に伴い、病院の診療情報（カルテ、薬の処方箋、検査数値など）はデータベース化されている。

この日々の診療記録を点検して、記入漏れや誤記を各担当者に訂正してもらいながら完成させ、必要に応じていつでも使えるように管理しているのが診療情報管理士だ。

国立病院機構金沢医療センター医療情報管理室に勤める稲垣時子さん（46）は、おもに、がん循環器病（脳卒中・心筋梗塞）の登録を担当する。

例えば、がんの場合、患者ごとに診断・初回治療・予後など48項目の情報を打ち込む。集積される1年間の部位別・年齢別・男女別の罹患率▽来院経路別（他の病院の紹介、がん検診、健康診断など）▽治療前の進行度▽手術症例の5年生存率などができあがる。このとき、情報は患者個人が特定できないよう、原簿から切り離される。

「地域における疾病の調査や当院の治療の妥当性などについて、院内の第三者が科学的根拠をもとにチェックでき、結果として精度

の高い記録として集積することもできます。これらは病院の財産になります」と小島増彦病院長は言う。

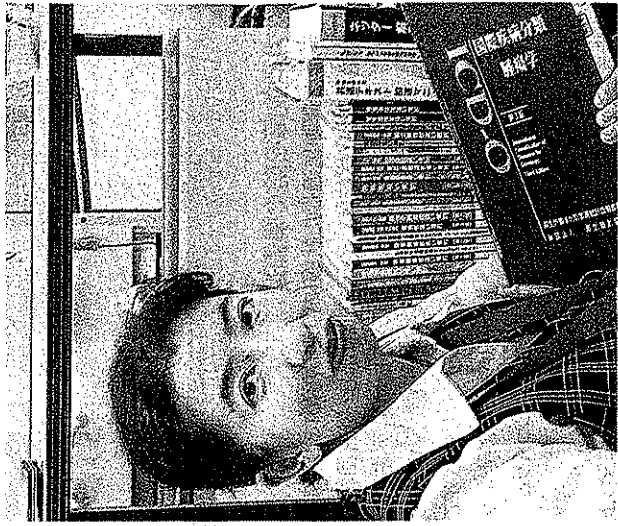
情報登録は患者の退院後から始まる。稲垣さんが「診療記録の監視役」として、医療従事者に丁寧な記入を求めると、1日の入院患者数が580人にもものぼることから、多忙な現場で理解を得るのは難しかった。そこで、稲垣さんは患者の治療方針などを決めるカンファレンス（会議）に積極的に出席して勉強するとともに、院内のコミュニケーションもはかかった。

「3年後のいまでは、『患者さんの生涯の病歴記録』と、院内で認識されるようになり、記載が充実してきました」

稲垣さんは女性でも長く働ける仕事に就きたいと医療事務の資格を取り病院に就職した。働きながら13年目に通信教育で診療情報管理士の資格を取得。現在の病院ではその働きぶりが認められ、4年目に非常勤から常勤の正職員に採用された。

「カルテを見るときは、自分が患者だったら大切な記録として納得できるかどうか、いつも念頭に置いています」

（医療ジャーナリスト・榎原麻也）  
（アスパラクラフのホームページに稲垣さんのコラムを掲載しています）



97年、診療情報管理士資格取得。09年、院内がん登録指導者研修を修了し、北陸地方のがん登録を牽引する。08年から国立病院機構金沢医療センターの医療情報係長。趣味はサッカー観戦。



68年生まれ。91年、亀田メディカルセンター  
田総合病院に勤務。日本臨床工学技士会  
員、千葉県臨床工学技士会常務理事。

## 患者を 支える人々

### 臨床工学技士

#### 近藤敏哉さん

## 1 医療機器管理のスペシャリスト 2 手術に立ち会い、異常を察知

千葉県鴨川市の亀田総合病院（925床）に臨床工学技士は95人いる。臨床工学技士は医療機器のスペシャリストで、内科・外科を問わず、おもに治療中の操作・監視とトラブル対応、その前後の保守点検などの管理をする。

キャリア18年目の近藤敏哉さん（41）は1日平均4、5件の手術を担当している。

たとえば、脳腫瘍の場合は心電図モニター、麻酔器、頭の骨をおけるドリル、腫瘍を切除する電気メス。切除時に患部を拡大するマイクロ顕微鏡、血管から腫瘍をうまくはがすための超音波手術器などが用いられる。

手術中、それらが安全に確実に作動しているか、近藤さんは目で見るだけでなく、耳で音を聞き分けながら異常を察知する。

「メスの切れ味が悪くなるといつも警告音がある。そんなときは手術がスムーズに進行するよう、医師が気付かないことに刃先を交換します」

メーカーごとの特徴や性能にも詳しいので、医師から相談を受け助言することもある。

消化器内科医長の三方林太郎医師は「臨床工学技士さんが手術室にいらしてくださると、トラブルがあってもすぐ対応できる。非常に心強い存在です」と言い切る。

だが、臨床工学技士が手術室に立ち会う病院は、全国的にまだ少ない。

退院後の在宅療養時には、患者がモルヒネなどの鎮痛剤で痛みをコントロールするための小型ポンプを手配し、使い方を説明する。

近年、治療の進歩とともに医療機器は性能がより高度化され、種類が膨大に増えた。亀田総合病院には50種類以上1000を超す医療機器が登録されているが「それらのことは任せてほしい」と胸を張る。

近藤さんは小さい頃から電気や機械が大好きで「いつも片手にドリライパーを握っていた。医療の道は縁遠いと思っていたが、学生時代にこの仕事を知り興味を持った。

96年から13年連続、医師が集まる日本内視鏡外科学会で臨床工学技士の役割を発表する。

毎年、新しい医療機器が病院に担当教導入されるので、週末は勉強に充てている。「病院では完全に縁の下の方持ち。でも、自分がかかわる機械によって患者さんが元気になるのはうれしいです」（医療ジャーナリスト・榎原麻希）

（アスパラクラフのホーム  
ページに榎原さんのコラム  
を掲載しています）

いな の とし み  
管理栄養士 稲野利美さん



63年生まれ。86年から聖隷三方原病院、聖隷沼津病院を経て、02年から現職。共編著『がん患者さんと家族のための抗がん剤・放射線治療と食事のくふう』（女子栄養大学出版部）。

患者を支える人々

がん治療では、食べられなくなることがよくある。

手術の影響、化学療法や放射線療法の副作用のほか、がんの症状や心の問題もからむ。

たとえば、「食欲がない」「においが不快」「味がしない、おかしい」など。

口内炎や吐き気、便秘、下痢などで悩む場合もある。

そんなとき相談にのってくれるのが管理栄養士だ。

静岡県立静岡がんセンター栄養室長の稲野利美さん(46)は5病棟150人ほどの入院患者を担当する。

出勤後すぐ、治療の進行に沿って1日約60人のカルテを確認、気になることがあると病室を訪問。食べたいものや、食べられそうな形状、素材から、食事の考え

方まで、患者の話を詳しく聞く。

病室の食事は、かつて量面の栄養管理や効率が優先されたが、近年は「人間栄養学」として個別事情に応じた対応に目が向けられている。

「食事は治療を受けるための体力づくりであり楽しみであり、生きることにつながる」

同県御殿場市在住で入院中の東るみ子さん(57)には流動食の指示が出たので、食事はポタージュや重湯などが運ばれていた。だが食欲がわかず、ほとんど手をつけない日が続いた。

ある日、管理栄養士が病室で顔色を見ながら話を聞いてくれた。「その後は同じ流動食でも、卵豆腐や温泉卵が1品付くようになり、なんだか気持ちがホッとして、食べられるようになりました」と

東さんは笑顔で話す。

静岡がんセンターではベッド脇の液晶画面で、写真を見ながら献立を選べる。食以外で、食べたときにおやつを持ってきてくれるサービスもある。

稲野さんは管理栄養士22年目。でも36歳のとき、薬のよちに成果が顕著に出ないという無力感から、一度仕事を辞めた。静岡がんセンターの開設をきっかけに復帰した。

8年目のいまは「たとえ種類でも、ひとときでも食べられるようになり、患者さんの表情が生き生きとしたとき、この仕事に戻ってよかったと思います」。

(医療ジャーナリスト・榎原麻希)  
(アスパラクラフのホームページ)  
に榎原さんのコラムを掲載しています

① 1日60人のカルテを確認

② 病室訪れ、食事の考え方を聞く